

氏 名	条 和沙
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	甲第 188 号
学位授与年月日	2015（平成 27）年 9 月 13 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	大衆化するヴィクトリア朝のジャポニスム —唯美主義から女性による室内装飾へ—
論 文 審 査 委 員	主査 河本真理 （相関文化論専攻 教授） 副査 山田忠彰 （相関文化論専攻 教授） 副査 坂井妙子 （相関文化論専攻 教授） 副査 馬渕明子 （国立西洋美術館館長） 副査 橋本順光 （大阪大学大学院准教授）

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、19 世紀後半のイギリスのジャポニスムについて、唯美主義運動を背景とした大衆文化との関連性に着目しながら、異文化受容の現象として、社会的・経済的・ジェンダー的観点から考察したものである。

イギリスのジャポニスムは、フランスの場合ほど十分な研究が進められているとは言い難い上に、従来の研究は、男性の芸術家やデザイナー、コレクターを中心に論じたものがほとんどであった。また、日本美術が西洋の芸術的価値の脱構築に貢献し、モダニズム絵画あるいはモダン・デザインの誕生に寄与したという側面ばかりが重視され、日本から大量にわたった工芸品がイギリスの室内装飾の市場に流通し、ミドル・クラスの主婦を介して一般家庭にまで浸透したという事実は、等閑視されてきた。しかしながら、美術史の枠組みを超え、ジャポニスムを広く文化現象として捉えるならば、幕末明治期の日本と政治的・経済的に密接な関係にあったイギリスにおいて、ジャポニスムがどのようにミドル・クラスの女性を巻き込んだ社会現象と化したのかということは、決して見過ごすことのできない問題である。本論文は、こうしたジェンダー的視座に立ち、大衆、とりわけ女性消費者の視点を組み込むことで、これまで男性の芸術家やデザイナー、コレクターを言説の中心に据えてきた従来の研究とは異なる角度から、ジャポニスムを捉え直そうとしたものである。

本論文は 4 章から成る。まず第 1 章では、日本美術受容の基盤を築いた男性コレクターによる、博物館の日本美術コレクションの形成史をたどった。その際、パブリック・コレクションの例として大英博物館、個人コレクションの例として、リヴァプールのコレクターにして日本の名誉領

事となったジェームズ・ロード・ボウズによる私設美術館を取り上げた。大英博物館のコレクションの中核を築いた学芸員オーガスタス・ウォラトン・フランク스와コレクターのウィリアム・アンダーソンは、イギリスにおいてまだ日本美術史が確立していなかった時代に、国家の威信をかけ、周辺諸国に先駆けて体系的な陶磁器あるいは絵画コレクションを構築した。こうしたコレクターとしての力量が問われたのは、先史時代から同時代の美術品まで、コレクションを通史的に網羅したボウズの活動にも共通している。こうした彼らの収集活動は、いずれも公的かつ男性主義的な領域に属するものと言えるだろう。

こうしたコレクションの形成を踏まえつつ、日本美術に最初に美的価値を与え、趣味の良い室内装飾品として位置づけたのもまた、男性を中心とするハイ・カルチャーである。第2章では、ジャポニズムが大衆的な人気を博する前段階として、趣味としての日本美術受容が醸成されてゆく過程を、唯美主義を牽引した芸術家（ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ、ジェームズ・マクニール・ホイッスラーら）やパトロンたち（フレデリック・レイランド、アイオニディス家）による邸宅やアトリエの室内装飾を通して分析した。画家のアトリエでモデルを引き立てる小道具として用いられた屏風や、西洋画のトンド（円形画）のように壁に貼り付けられた団扇、あるいはパトロンの邸宅において漆器や日本画がはめ込まれた壁面装飾は、彼らが日本美術本来の形式や機能に捕われることなく、生活空間に採り入れた実態を示している。そこでは、美術館の公的コレクションの場合のように、作品の背景にある歴史や文化は問題にはならず、むしろその主眼は、室内の美観を高める装飾品であるかどうかという「趣味」の問題に置かれていた。彼らのような芸術界のエリートたちが実践した日本趣味の室内装飾が、手引書や雑誌などのマスメディアで繰り返し紹介されることによって、しだいに日本の美術品それ自体が、あたかも「良き趣味」をあらわす記号であるかのように機能してゆくのである。

このように男性文化の中で育まれた「良き趣味」としての日本イメージは、イギリスの家具や調度、陶磁器などの主要メーカーが、著名なデザイナーを迎えて「芸術的な」ジャポニズムの製品を次々と市場に送り出していったことでさらに高まってゆく。第3章では、唯美主義の芸術家によって見出されたジャポニズムが、イギリスの産業デザインの分野においても「良き趣味」のモデルとされていたことに着目して、イギリスのデザイナー（ルイス・フォアマン・デイ、ウィリアム・エドワード・ゴドウィンら）や製造業者（ロイヤル・ウースター社など）が日本のいかなる部分に関心を示し、デザインに応用していったのかを分析した。1850年代以降、イギリスでは、国を挙げて産業デザインの改良が進められており、日本の美術品は優れたデザインの例として、壁紙（金唐革紙を含む）、テキスタイル、陶磁器など、様々な分野で参照されていた。とりわけデザイナーや製造業者が着目したのは、日本の美術品に見られる非対称の構図や原色を避けた淡い色調、自然の形態を装飾的なモチーフへと作り変える手法であった。こうした造形上のヒントは、西洋の伝統的・写実的な自然表現や美意識の見直しを促し、イギリスの産業デザインは、それまでの装飾過多なデザインから、シンプルで洗練されたモダン・デザインへと転換を図るきっかけを手に入れた。

1880年代に入ると、こうしたジャポニズムの製品に加えて、以前は一部の芸術家や文化人の

間で受容されていた日本の美術品が、手頃な室内装飾品として市場に大量に流通し、ミドル・クラスの家庭にまで浸透するようになる。第4章では、供給と需要のシステムが形成されたことで生じた、日本趣味の大衆化とその担い手としての女性たちをめぐる問題を、商取引の記録や百貨店の商品カタログや広告、当時出版された室内装飾の手引書や家庭雑誌等の一次資料から分析した。日本から大量に輸送された屏風や団扇、陶磁器といった品々は、ロンドンの百貨店リバティーズなどにおいて、安価で芸術的な装飾品という宣伝文句で、ミドル・クラスの女性たちを主な顧客として販売されていた。ミドル・クラスの女性たちの間で、こうした日本の美術品の需要が高まった背景には、そもそも男性を公領域、女性を私領域と結びつけ、家庭を外的世界からの避難所と位置づけるヴィクトリア朝の家庭観があった。家庭の室内装飾は、仕事場のアンチテーゼとして明るく華やかな雰囲気が求められ、輸出用に作られた装飾的な日本の美術品がそれにふさわしいと考えられたのである。日本趣味の室内装飾は、書斎や喫煙室といった主に男性が使用する空間から完全に排除されたわけではないものの、実際には、ブドワールやドローイング・ルームといった女性たちの私的空間に適用される傾向にあり、室内装飾もまたジェンダー化されていたことが分かる。室内をいかに美しく装飾するかということに、アッパー・クラスに近づくための強迫観念的なアイデンティティを見出していたミドル・クラスの女性たちにとって、芸術的でエキゾチックな日本の美術品は、格好の自己実現の手段であり、安価であることから大量に消費されるようになったのである。しかしながら、こうした大衆消費と質の低下を機に、唯美主義の芸術家やデザイナーによって「良き趣味」とされていた日本の美術品は、消耗される「流行」現象に転化し、芸術的な魅力を失ってゆく。さらに、大量消費の対象となった日本趣味は、とりわけ「女性性」に結びつけられたことで、ジャポニスムに先鞭をつけた当の唯美主義の男性芸術家やデザイナーからは批判されるようになった。

だが、その一方で、西洋化と富国強兵を進め、日清戦争と日露戦争で勝利を収めた日本自体は、政治的・軍事的プレゼンスを高めたことによって、むしろ「男性性」を強調した姿で表象されるようになる。逆説的ではあるが、「前近代」で「半文明国」であった（江戸）時代の日本美術の造形言語（平面性、左右非対称性、自然表現）が評価され、モダニズム（あるいはモダン・デザイン）に採り入れられたのに対し、日本自体が日清・日露戦争の勝利で「近代」的男性的「文明国」の仲間入りを果たしたとき、ジャポニスムは男性的なモダニズムの領域から排除されて女性的な領域に移行しつつあったのである。しかしながら、西欧列強の脅威となり始めた現実の「男性的な」日本は、しだいに「幻想の異国」を投影できる対象ではなくなっていった。こうして、ジャポニスムの言説と現実の日本の乖離が大きくなっていったことが、ミドル・クラスも含めたジャポニスムの流行を終焉に向かわせることとなる。

このように、本論文では、従来のジャポニスム研究では見落とされてきた一次資料の分析を通して、極めて多くの日本の美術品がイギリスのミドル・クラスの女性たちによって購入され、家庭の装飾品として消費されていたことを明らかにした。こうしたミドル・クラスの女性たちによる大衆的なレベルでの受容があったからこそ、日本美術という異国の文化が、様々な転用を経ながらも、イギリスの家庭に深く浸透したひとつの文化現象を作り出すに至ったのである。しかし

ながら、その後のジャポニスム研究では、男性の芸術家やデザイナー、コレクターが注目される一方で、ミドル・クラスの女性たちによるジャポニスムの受容は、あたかも存在しないかのように扱われ、その歴史的意義が問われることはなかった。つまり、日本の美術品受容のあり方は、それが男性的な領域に属するものなのか、あるいは女性的な領域に従属するものなのかというコンテキストによって、評価が二分されてきたのである。その意味において、本論文で19世紀後半のイギリスのジャポニスムの多様性を明らかにしたことは、1970年代以降のジャポニスム研究史においても作用してきたジェンダーの力学の偏向を明るみに出し、ジャポニスムの受容史そのものを再構築する可能性を開くことに他ならない。

## 論文審査結果の要旨

本論文の独創性は、男性の著名芸術家やデザイナー、コレクターをもっぱら対象としてきたジャポニスムの先行研究に対して、イギリスのミドル・クラスの無名の女性消費者による需要を取り上げた点にある。男性による蒐集から女性による消費へと主体の転換を発掘した点は、従来のジャポニスム研究を塗り替える画期的試みであると、審査員全員の高い評価を得た。

本論文は、美術史のみならず社会史や近代史などの先行研究を的確に踏まえた上で、ロンドンやリヴァプールのアーカイヴで綿密に一次資料を調査し、豊富な具体例に基づいて丁寧に論証を積み上げている。様々な一覧表（カウタン社注文控え帳に見られるジャポニスムの壁紙・金唐革紙の使用例の一覧など）や関連年表といった付帯資料も特筆すべきで、長年にわたるジャポニスム研究の成果を反映する労作と言える。

とりわけ、第1章で取り上げられたリヴァプールの男性コレクター、ジェームズ・ロード・ボウズに関しては、ボウズ美術館の展示品一覧やボウズと関わった日本人の一覧表といった資料が充実している。日本の名誉領事を務めるなど、日英間の経済的・政治的關係においてきわめて重要な役割を果たしたにもかかわらず、過小評価されてきたボウズとリヴァプールのネットワークに光を当てたのは、本論文の功績と言えよう。

本論文は、第1章で男性コレクター、第2章で唯美主義の男性芸術家、第3章で男性デザイナーによる日本美術受容の過程を丁寧にたどり、こうしたプロセスをまず経ることが必要だったことを明らかにした上で、論文の白眉と言える第4章で、ジャポニスムがミドル・クラスの女性によってファッショナブルな家庭の室内装飾品として大量に消費されるという、ヴィクトリア朝のイギリスに特有な熱狂的な社会現象と化した状態を、商取引の記録やリバティーズの商品カタログ・広告、当時出版された室内装飾の手引書や女性向けの家庭雑誌の言説を駆使して、精緻に分析している。

こうして本論文が、公的なものから私的なものへの趣味の移行と、それに伴う大衆化の問題を

扱うとともに、それがジェンダー的な男性性／女性性の問題として語られてきたことを指摘し、ジャポニズムをジェンダー的視座から読み直した点は、審査員全員から高い評価を受けた。

今後の検討を要する点として、リヴァプールのボウズの蒐集（第1章）とミドル・クラスの女性による消費（第4章）をもう少し関連づけて論じたらなおよかったのではないか、という指摘があった。女性における東洋趣味全般に関して、17－18世紀の王侯貴族の女性たちと、19世紀末のミドル・クラスの女性たちとの間の差異と断絶を明確にすべきとの指摘もあった。ジャポニズムの女性化が、女性消費者（第4章）よりも前の段階、すなわち唯美主義の男性芸術家が室内を装飾した時点（第2章）ですでに起こっていたとは考えられないか、という意見も出された。また、イギリスにおけるシノワズリー（中国趣味）とジャポニズムの関係、イギリスの産業デザイン政策とフランスのジャポニズムとの関係、イギリスの「家庭の天使」と当時西洋に流布した理想化された日本女性のイメージとの関連など、本研究を起点としてさらに考察を深めるべき点も示された。

このように、今後の課題はあるものの、本論文が高い質を有し、ジャポニズム研究に大きく貢献するという評価においては、審査委員全員の一致を見た。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士論文としての水準に達していると評価し、全員一致で、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことを報告する。